

セナガアナバチの二三の生活記録

郡 場 央 基

京都市北区烏丸鞍馬口東入ル二筋目下ル

Some biological notes on *Ampulex amoena* Stål

By Ohki Kohriba

セナガアナバチ *Ampulex amoena* Stål を京都市内の自宅で、最初にみつけたのは、1951年の夏である。それ以後私は毎年庭の同じ樅の幹の上で、また屋内に侵入してくるのを見ている。年をおつてそれを認める機会が多くなつてきたことは明かである。1956年になつて、いままでの断片的記録をまとめるに十分な観察をすることができた。しかし岩田久二雄氏から、本種に関する同じような記録がすでに、吉川公雄氏と加茂豊策氏によつて、大阪と静岡において別個にとられ、すでに報文の用意があることをきいたので、私はその両報告にない項目に重点をおいて簡単に私の京都における記録をまとめた。

(1) 成虫の栄養 庭の樹幹上を徘徊する本種は、私のみる所では、アブラゼミとニイニイゼミが口吻を刺しこんだ坑からの分泌樹液をなめているようである。セミのとまる所が少しかく、確認が困難であるが、吸汁中のセミの体の下にもぐりこんで吸収するし、時にはセミをその場所から追払うのがみられた。

(2) 活動期と活動時刻 活動期間はかなり長く、各々1雌成虫の最初の活動は、1954年では6月21日、1956年では6月29日であり、最後の活動をみたのは、1954年では11月1日で、1955年は11月13日であつた。この最後の個体は飼育瓶中で蜂蜜をあたえていたが11月17日に死亡した。秋末の成虫は常に日当りのよい場所で見られた。活動時刻には特に明かな制限はないようで、梅雨後の二月には、午後よくみられ、時に20時(夏時刻)にまで活動をみる。

(3) 営巣場所 ただ一回自然条件での営巣を1952年8月19日に見た。1匹の雌が鶏小屋の側に堆積した木箱の間に入るの、箱をとりわけると、箱と箱の隙間に14耗長のゴキブリの若虫がいて、その腹面に5耗長に成育した蜂の幼虫をみつけた。この幼虫は8月22日に結繭を完了した。この事実からして、適当な場所があると、何回かの営巣をそこで行うようである。

(4) 交尾 1956年8月13日以来飼育器内でかつていた雌は、ゴキブリを与えても全く攻撃しようとしなかつた。8月19日に庭で雄を捕えたので雌と同容器にいれたが、23日に雄が雌の背面にのつて交尾の姿勢をとつているのをみとめた。

(5) 狩 獵 1956年8月13日午すぎ、屋内に入ってきた1雌を捕えて、かねて用意しておいた体長18耗のクロゴキブリ *Periplaneta picea* Shiraki の若虫とともに、平板型人工蟻巣の中に入れて観察した。この装置は二枚の硝子板を枠で支えたもので縦7耗、横5耗、高さ5耗の大きさに蟻巣部と餌場とは仕切られていて、蜂は両方の部屋を出入できるが、ゴキブリは餌場には出られないようになっていた。蜂はしばらく餌場を歩きまわつた後、切仕を越えて巣部に侵入した。初め蜂の方を向いて触角で探っていたゴキブリが逃避しようとして逆方向をむくのと殆ど同時に蜂はとびかかった。捕らないで狭い空間をめまぐるしく走りまわつた。蜂はとびかかる寸前に体を前方に高くもちあげ大顎を大きく開く。ゴキブリの肢にかみついて逃亡をおさえてから、すぐに腹部第2節の左端にくわえかえた。腹部を下前方に伸ばしてゴキブリの体の下面を刺した。その刺点は明確には認めることはできなかったが、恐らく刺点を探すのであろうが、この姿勢はかなり長く持続した。結果としてゴキブリは殆ど歩行不能となつた。蜂はゆつくりとゴキブリの頭の方にまわつて、触角のつけ根をくわえてひつぱりながら、今度は顎部腹面中央に3度針を刺しこんだ。次いで触角のつけ根をくわえて運搬しはじめた。産卵は暗所で行うのであろうと思つて、おおいをした。6分後におおいをとると、すでにゴキブリの触角は6耗位の長さに切断されていて、蜂の卵は左中肢の基節のつけ根に、それに縦に沿つて産みつけられていた。卵は乳白色で長さ2.5耗、幅1耗弱、基節のつけ根にある頭端の方が他端より丸味をおびている。

(6) 発 育 卵をつけたゴキブリは触れると強く肢を動かし、ひつくりかえすと強い起上り運動を示す。所謂不完全永久麻痺であるが、自ら歩くことはできない。果汁を与えるときよく吸収する。8月13日14時に産下された卵は15日早朝孵化した。すぐに膜質部に口をあてて吸血をはじめた。16日14時半には幼虫は5耗、ゴキブリが動くとき中肢が幼虫の腹部に触れる。17日9時半幼虫の腹端がゴキブリの中肢転節を押すので中肢は後方に伸ばされている。かなり弱つたがふれると肢を動かす。13時にはゴキブリの体内に頭部を入れて食いはじめたが、まだ触れると肢を動かす。22時にはゴキブリは触角と後肢に僅に反応を示すだけになつた。19日幼虫はゴキブリの内容を全部食いつくして外皮をかじり始めた。21時には幼虫は結繭を始めた。20日7時半繭の外形ができた。10時繭の内側を褐色に塗つた。21日8時繭赤褐色となつたが尚中で幼虫の動くのがみえる。18時濃赤褐色となる。22日黒褐色となる。繭は18耗、長6耗幅で両端に乳頭突起がある。9月19日1匹の雌が羽化脱出した。この雌は10月4日にいたつても、まだ狩獵本能を現わさない。卵期40時間、摂食幼虫期約110時間、全発育期36日である。

(7) 麻痺の回復 1956年8月3日、物置小屋の壁を這うクロゴキブリの成虫をみると両触角が5耗の長さに切断されていた。走り方も鈍く、手にのせることが出来た。明に麻痺から回復して成虫になつたものと思われた。卵はもちろん附着していなかつた。

以上本種についての観察は、ウィリアムス*が北米で行つた同属他種の観察とよくにいてい

* The New Caledonian Cockroach Wasp (*Ampulex compressa*) in Hawaii. By F. X. Williams. Hawaiian Planters' Record, XLVI, 1942.

る。京都市において本種が次第にその数を増して来たことは明かで、今後ゴキブリ防遏に大きい役割を果たすことであろう。最後に岩田久二雄氏に深謝する。

Résumé

- (1) I found *Ampulex amoena* Stål in Kyoto first in the summer of 1951. Since then the wasp was observed every year in my garden. It appears in June and disappears in late autumn. In 1954 the first ♀ was found on June 21 while in 1956 on June 29 and the last ♀ was seen on Nov. 13 in 1955.
- (2) The adult wasps (♀♂) seems to suck in sap oozing out from the points injured by the rostrum of cicadas (*Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky and *Platypleura kaempheri* Fabricius on *Abies* and other trees.
- (3) The female wasp hunts the medium-sized nymph of *Periplaneta picea* Shiraki and hides it in some crevices of wooden buildings to oviposit on it. At 2 p.m. on Aug. 13, 1956, I observed only once her hunting habit in a small glass box (7×5×0.5 cm.) made as a cage for artificial ant nest. "She grasped one of the cockroach legs with her mandibles to prevent it from escape and soon changed her grasping point to the edge of its 2nd abdominal tergite. She stretched her abdomen towards the ventral surface of its thorax to sting it at the base of one of its coxae. The stinging point was not ascertained. Then she seized it by the proximal portion of its antennae and stung it 3 times behind its gular region. She began to transport it seizing by its antennae."
- (4) The paralyzed cockroach (18 mm. long) had short-cut antennae (6 mm. long) and was able to move its legs violently when stimulated but not walk voluntarily. It could suck up fruit juice the next day. The wasp egg (2.5×0.95 mm.) was attached longitudinally along the basal portion of one of its meso-coxae, directing its cephalic pole proximad.
- (5) The above egg hatched at 6:35 a.m. on Aug. 15. After sucking up the body fluid, the larva began to devour the prey at 15 p.m. on Aug. 17 and the prey lost its response ability. On Aug. 20 the larva spun its cocoon and on Sep. 19 a female wasp came out from this cocoon.

Neocolochelyna itoi Takeuchi の寄主植物

安 松 京 三

この珍しいハバチについては、昆蟲, vol. 23, p. 154 (1955) に富樫一次氏の分布記録がある。本種は九州の英彦山には極めて多いが、その幼虫の食餌植物は *Actinidia arguta* Planchon サルナシ (サルナシ科) である。5月から6月上旬にかけて、サルナシの葉肉中に多数の卵が産み込まれる。